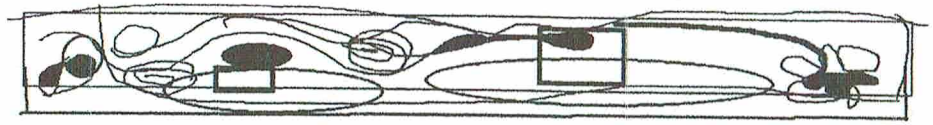
二〇一八年(平成三十年)七月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十五巻第七号

村野次郎創刊

香蘭

2018年(平成30年)7月号

第95巻　第7号　通巻1051号



香蘭

2018年(平成30年)7月号
第95巻　第7号　通巻1051号

目次

村野次郎作品　私の愛誦歌(35)……村上　美智代…表二
今月の特選……石井・坪・鈴木(桂)・伊藤(美)・渡辺(礼)・伊藤(康)・飯島・西野・高橋(登)……2
作品
一……4
二……20
三……30
推薦香蘭集……40
香蘭集……41
村野次郎への旅(100)……千々和　久幸……18
歌の生まれる場所(67)……沙　阿羅……29
七首抄(五月号)……市川・寺澤・大島・篠永……39
エッセイ・自由研究　ふる里—短歌の村……楯　恒子……46
焦点(五月号)　春を待つ心……香山　静子……48
作品一特選欄評(五月号)……桜井　京子……50
作品評(五月号)　作品一……坪　裕……52
作品二……関口　静子……54
作品三……中井房江……56
香蘭集……山口　惠子……58
緑地帯……室橋・小野(葉)・原(礼)……60
他誌拝見　91……村上　美智代……63
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き……64
歌会及び会合・後記・会員消息・他・編集後記・新宿日記……67・表三
表紙絵……香蘭短歌会のマーク「蘭の花」　目次カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（35）

傘ふかくさしたる中に煙草の火つけんと
雨の道に立ちどまる

『明宝』

村上　美智代

わが家の貧しい書棚に一冊の立派な装丁の歌集がある。大阪の全国大会の折に頂いた、『明宝』である。「私の愛誦歌」の依頼を受け、付箋のつくページを読み返し目を止めたのがこの度の抽出歌である。

雨に煙る街角に立ち止まり、傘で風雨を避けながら煙草に火を点ける、先生のダンディな姿が偲ばれ、まるで映画のワンシーンでも見る様な哀愁漂う一首である。ただ単に煙草が吸いたくなったからではないのだ。経営者として様々な悩みを抱えていたであろう。考え事を整理するには一服の煙草が必要だったのかも知れぬ。〈いひがたきこのもどかしさぢりぢりとわが指先の煙草はけぶる〉（『村野次郎三百首』24頁）の他にも何首か煙草の歌に出合い、先生のお人柄に触れることが出来た。

残念ながら一面識もなく、一度お会いしたかったと今更ながら思うことである。

（『明宝』105頁。『村野次郎三百首』には掲載されていない）

四選者の作品

ちぎれ雲　　平塚　千々和　久幸

街路樹の枝払われて下通る人が常より簡素に歩く
われもまたちぎれ雲なり陽の残る野末あっけらかんと明るし
野の果ての鉄塔が銀に輝くもいくばくか今日のかなしみに触る
お笑いより政治の茶番が面白きテレビ見ている目の腐らんか
終活も断捨離もなし浮世とは遠きところに暮らし来たれば
明日の米磨ぎて再び飲み始む前後はあらず　ずうっと一人
生きてあらば一〇八歳か飲兵衛のわが父未だ行方のしれず
病棟の妻の日日にもいくばくか起伏のあらん日捲りを剥ぐ

他人は他人　　西沢　みつぎ

咲いたとて散つたからとていささかも心弾まず老い果てにけり
破る児の住まふことなく戸障子の煤けて家も人も老いたり
湯呑みはた急須なる物あつたつけ　ペットボトルの山なす廃棄
他人は他人われにはわれの九十の齢を生きて新緑を見る
雨戸閉ぢんとガラス戸あけて降るを知る唱歌にありしあの春の雨
命終を知らぬ花との日にちは支へともまた疲れともなく
ひとつだに苔残さず咲き遂げて死出の支度をせよと囁く
ひと跨ぎの国の境を家居にて見せられしばし拍子抜けせり

春嵐　　鎌倉　香山　静子

目薬をさしたる眼にさはさはと揺らめき止まぬ緑なす山
若草の山々ゆらす春嵐　それより始まるわれの追憶
遠き日の君に似てゐる人がゆく　ああ、雑踏にまぎれてしまふ
かわいげの微塵もあらぬ声に鳴くひよどり君にも家族あるらむ
耀へる春の水面をしなやかにくちなは一匹よぎりゆきたり
車窓より見ゆる家の裏側に古きテレビが寝転んでゐる
命あるもののごとくに砂は哭く真冬の海の風に呻られ
国会の証人喚問に答へゐる佐川氏の白髪がときをり光る

御衣黄　　我孫子　丸山　三枝子

はつなつの利根川沿いを行きながら水が水呼ぶ声のするなり
桜もう過ぎたと来れば沼の辺にひっそりとああ御衣黄咲けり
葉ざくらの道を戻りぬ23価肺炎球菌ワクチン受けて
五年以上間隔空けよと接種日のシール渡さる　惚けるだろうと
乗換えの手順に馴れて近道を覚えて通う総合病院循環器科
付き添われいる人付き添う人並び椅子に静けし診察室の前
二本ある津南の天然軟水と言って一本きみに手わたす
ブロックを積みて砦を作りゆく時間を積みてゆくように子は

今月の特選

風のローソン　　習志野　石井雅子

介護受ける未来もたのしロボットにお姫様だつこしてよと囁く
うつむいて本読むひとが並びたり夜の国道　風のローソン
受験子の使はなかつた鉛筆に湯島天神梅鉢の紋
もうすぐに伐られちやふんだ建築の予定地に立つ欅の若葉
オリオン座を十歳の子に教へられ風に向かひて中華屋にゆく
バス停にバス待つやうに老い母はもうくるはずと春を待ちをり
それぞれに「馬鹿な女」を定義して短歌の世界にセクハラはなし

日本は　　東京　坪裕

高齢者ばかりが増えて日本はいくさの出来ぬ国になつたね
日本の人口どんどん減りゆきて詩歌もその内消えてゆかんか
憲法が右傾化しつつ揺れており国会議事堂にさくら咲く頃
西行が願ったように花の頃ピンピンコロリと逝かせてくれよ
自転車の冷たきハンドル握りしめ冬の町へと夢買いに行く
園児らの中にはみだす児らもいてひとかたまりの未来が歩む
本当の親友なんていないのさ辛夷はぱっと白を吐きたり

雨になる　　西宮　鈴木桂子

はかり得ぬ未来を持てばさみどりのメタセコイアの木々の揺れ立つ
心せぬ雨となりたる春の夜の卓にひとりを歎いてをれば
そんなことあつてはならぬ。遺歌集となりて青年の死が届けらる
真昼間の音なき街に踏みまどひ惑ひて空に揺らぐ一日を
六甲の山かげ闇にとける頃われに少しの後悔生るる
喉裂きて啼けるがごとき鷺の声この我にどうせよと言ふのか
あかつきの弦月朱し動くものまだなき影のごとき街の上

鳥のかたち　　川崎　伊藤美恵子

張りつめて人に会いたる夜の眠り水の中よりヒヤシンス咲く
パンの上に絞りだしたるクリームの鳥のかたちに三月の昼
函館の青柳町の花ですよ　矢車草を撫子という夫
この家の牡丹はみんな傘をさす花の色にはおかまいなしの
同じもの食べてお腹をこわす人　こわさぬ人との三食不気味
家刀自が寝こめばたちまちこの家は荒れ野となるなり　ああしんどいぞ
丘の上の家に子育てしてたころ風呂場の石鹸ねずみが齧りぬ

わたしです　　横浜　渡辺礼比子

晶子展会場の隅に流れおり明治女の声のもにゃもにゃ
睨むあり困り顔あり笑わざる展示写真の晶子親しも
小鰯とオニオンが二物衝突す歌人の作るサンドイッチは
ながながと繰りごと言いし姑がふとホームの窓の春月を賞む
慰めをいわんとするに窓の外のツツジ疾風に散らされゆけり
青信号点滅するや駆け出だしついになからんわが林住期
缶チューハイ開けて飲んだのわたしです　惚けたかと君はいたく悩むを

牡丹　　東京　伊藤康子

引き売りの牡丹根づきて五十年幅利かし咲く庭の長老
亡き父の自慢の牡丹のほころびぬ一番花を供花となしたり
季の進みはやきこの春牡丹花の一日に咲き崩れてゆけり
クランベリージュースの赤に染めらるるグラスを残し帰ってゆけり
新入社員らしき男子が半額の惣菜選ぶ午後八時すぎ
中年のサラリーマンはてきぱきと半額の惣菜つぎつぎカゴへ
おぼつかぬ新人たちの乗り方にザワザワしてる四月の電車

枕詞の歌　　川崎　飯島智恵子

なまよみの甲斐に生まれて古里の兄弟を今は訪うこともなし
なるかみの音羽の滝を柄杓もてすくい飲みたり　さよなら京都（清水寺）
たらちねの母の見立てし京友禅着るときもなくて箪笥に眠る
しきたえの枕の下にかくしおき夜毎読みたり「チャタレイ夫人の恋人」
玉藻刈る乙女でありし面影の残れる叔母も九十八歳
こともあろうに群馬のホームに入るとうぬぼたまの夜の別れの電話
うちなびく黒髪きりりと結いあげて看護師の孫一歩踏み出す

うすくらがり　　東京　西野美智代

埋立ての進む辺野古の岸ちかくジュゴンの群れがのどかに泳ぐ
うららかな午後の階段教室に憲法九条の講義がひびく
茂吉展のうすくらがりに凝らしたる眼にやさしき槻の新緑
大石田に茂吉遺しし水絵具　白のみ欠けて十一色ある
人里をはなれ雑木に紛れぬて今しろじろと咲く山桜
挨拶を交はすくらぬがちやうどいいジャスミン窓をおほひたる家
とりたてて変哲のなき恋文が寺山修司の名に人を呼ぶ

あれよあれよと　　東京　高橋登喜

「思いのまま」と札つけ並ぶ紅椿植木市にて一鉢えらぶ
通勤の朝の電車にいとけなし制服制帽だぶだぶである
うすむらさきの藤の花咲く四月空オスプレイ五機の編隊がゆく
改ざんの書類に政府白を切る　太田道灌山吹の花
二十度を超える四、五日の弥生尽あれよあれよと木々が若葉す
白秋の居住跡地に人住みて育てる山野草アマドコロの花
木々百種みどり勢う公園に今朝セキレイが二羽いて遊ぶ

村野次郎への旅（100）
わが青春の村野次郎（一〇〇）

千々和　久　幸

今年は桜も藤も例年より早く咲き、そして散ってしまった。異常気象が続いているが、季節はもう歳時記の中にしか残っていないのかも知れない。

さて1965（昭和40）年5月号の先生の巻頭詠は、「瞼に来る海」八首である。

①塵埃の街に住みつつ夜々眠る瞼に来ては白き潮騒

②潮騒の渚に立ちてゐる一人まぼろしにして過去のわれなる

③憂ふれば浅き眠りの夢に来て白きかもめの群れひるがへる

④夜霧ふるネオンの街を来て眠る闇さざなみのごとくつづきて
（夜霧ふる街帰り来て眠る夜の闇さざなみのごとくつづきて）

⑤コンラッド読み終りたる夜のしじま耳の奥にて潮（うしほ）の音す

⑥旅が呼ぶ声耳にしていねしゆゑ海の青さに一夜ただよふ

⑦目のさめてしばらく空しまなうらに今見し海はただ青かりき
（目のさめてしばらく空しまなうらに今見し海の青くのこりつ）

⑧波白くよせて記憶にあらぬ海まなぶたにもち宵々ねむる
（波白くよせて記憶にのこる海まなぶたにもち宵々ねむる）

今月の先生の一連はいつもの時事詠とはひと味違い、自己の内面の心理を凝視したものである。それは潜在意識か幻影として、今もありありと瞼に焼き付いている光景である。海からは遠い土地に育った先生には、海はいまなお見果てぬ憧れと郷愁を誘う手掛かりであり、素材であった。

①の歌、この歌はいつもの序歌で、これから展開されるであろう心理ドラマを俯瞰したもので、読者にはお馴染みのプロローグである。先生らしい平明な詠み口で、難しいところはない。「塵埃の街」と「潮騒」を対比的に捉えたところが、わずかに一首のアクセントになっている。

②の歌、序歌からいよいよ主人公の描写に移る。渚に立っている人物は、先生の体験に基づくものか、観念の中で造型された自画像か、あるいはその両方を含むものか。潮騒を聞く孤独な歌人の面影が浮かぶ。

結句はやや駄目押しの感があるが、読者を意識したサービスとも読める。

③の歌、「憂ふ」（憂へる）は、手元の広辞苑によれば「嘆きや不満を人に訴える。嘆願する。まだぐちをこぼす」が第一義。だがここでは、そんな積極的な心の動きというより、そこはかとないかなしみ程度の流離ごころを籠めたニュアンスであろう。

ああかもめよ、おまえにわたしの言い知れぬこの憂いが分かるのか、といったニュアンスが読み取れる。

④の歌、「香蘭」初出の一、二句は歌集で手

直しされている。三、四句の句跨がりが、これでは眠る主体が作者か闇か曖昧であり、加えて「ネオンの街」は流行歌では定番のフレーズで、手垢のついたイメージを払拭出来ないからであろう。

歌集によって、一首がすっきり立ち上がった。作品の主意は、下句のさざなみに導かれた闇に心身を預けて、たゆたいつつ眠りに落ちる、という至福の時間にある。究極の自愛の歌、と言うべきか。

⑤の歌、初句にある「コンラッド」が、経済学者のJ、M、コンラッドか、詩人で作家の（表記では）コンラート・フェルディナント・マイヤーか、実ははっきりしない。

先生が当時どんな読書をされていたものかを、直接伺ったことはないが、世俗にも通暁されていた先生のことだから、わたしたちの想像もつかない本を読まれていたのかも知れない。という訳で、この歌はスルー。

⑥の歌、初句の「旅が呼ぶ」はどこかのツアーのコピーのようで、先生にしては珍しい表現である。しかしこれも意識の底にある、先生の漂泊願望の所産だと読める。

下句は牧水を思い出させる、現にはいささか大仰な表現だが、心理詠だと読めば納得がいく。六十九歳の先生には、まだ「青年の憂愁」が残っているのであろう。

⑦の歌、夢のあわいで目が覚めたものか。次の⑧の歌と入替えれば、一連の心理ドラマのエピローグとして座りが良い、などと読者のわたしは勝手な想像を膨らませている。

「空しさ」はよほど強い表現だが、ここではいま見た夢の脈絡を辿りながら、茫然としているさまが思われる。「空しさ」はその後に来た感慨だろう。また歌集では結句が推敲されているが、この方が納まりがいい。

⑧の歌、一連の歌を総括的に反芻した歌。面白いのは初出と歌集の異同で、初出の二句の「記憶にあらぬ」が歌集では「記憶にのこる」と、意味の上で正反対になっている。恐らくは先生の夢や想念に訪れる海は、そのどちらも真実であったのだろう。

目のさめた直後、どちらが強く先生の脳裏に焼き付いていたかであり、心理的に矛盾はない。推敲の筋道が見えて面白い。

今月は作品評一に先生の歌が牧野操同人によって採り上げられており、左に引く。

・東京より来しわが視野にあふれつつ草原空のはてにひろがる　　村野　次郎

一二句をうけて、三句の、あふれつつが非常によく効いてをり、下句によって阿蘇の大草原の光景が余すなく描写されてをり、我々の及ばぬ美事な表現である。

この作品は5月号で紹介した「阿蘇高原」一連八首の、第一首目の歌である。わたしは序歌と捉え下句を評価したが、牧野評は三句にも目を留めている。

わたしは白秋がひところ、「つつ」を多用したことを思い出していた。

ついでに歌会記事には、本社鎌倉合同歌会の出席者が記されている。一部を引く。

四月十八日、鎌倉野村宅にて、ヤクルト会社のバスで鎌倉常盤文庫、鎌倉山、海岸線を巡り後大貫氏の司会で歌会。村野先生の他に冬野清張、井上芳雄、島田卯女、今福祥、重松紀子、矢穂久仁子、竹内忠夫、尾崎孝子（歌壇新報）、石田幸子、大貫迪子など総勢四十三名。会場の野村宅は、野村泰三同人だと思うが、名前が落ちている。

往時の「香蘭」の勢いが偲ばれる。